

「神戸・震度6」情報空白18分

一月十七日、日本列島は全国的に冬型気圧配置の中にあつた。五つの管区気象台、百五十六か所の測候所などは雪、雲、風の流れを各地で追っていた。激しい揺

れ。ウエザーマンたちは真つ先に「科学の目」で地震波をとらえた。
神戸市中央区の高台にある神戸海洋気象台。午前五時四十六分五十二秒。揺れ

と同時に、一階現象室の壁の計測震度計表示に「6」の白い数字が浮き出た。この気象台が記録した戦後最高の数値は、一九五二年七月の吉野地震の「震度4」。

それを「2」もオーバーしている。当直勤務の春海孝（三〇）、花房真二（二六）、片桐一彦（二六）は、反射的に「6やーッ」。どれも6の経験がない。顔が引きつった。地震波は列島を走り抜けた。大阪・高槻の京都大防災研究所阿武山観測所は四十七分一秒、京阪電鉄枚方変電所は同十三秒、岐阜地方気象台は同二十秒、鳥取・境測候所は同二十六秒、静岡地方気象台

1920年開設。第1—第3庁舎があり、開設時の本館は59年に修復され、現在の第3庁舎に。職員82人、海洋気象観測船1隻を持つ（神戸市中央区、2月7日撮影）

神戸海洋気象台

は同三十六秒、五百キロのかたな東京の気象庁には四十八分二秒に届き、それでも震度「1」を記録した。

大阪・法円坂の大阪管区気象台は、直ちに気象庁地震観測室に衛星回線で第一報を送り「近畿地方で強い揺れ」と流した。

同五十五分に、地震津波監視システムに入った気象台、測候所からのデータにより地震情報第一号を発表。「震源地は淡路島（北緯三四・六度、東経一三五度）。深さは約二十キロ、地震規模はマグニチュード7・2と推定される。津波なし」とした。

気象庁にはこれとは別に「震度5 豊岡、彦根、京都……」と全国七十か所の震度情報が入った。だが、神戸と洲本の震度情報はなぜかない。

洲本市物部の官舎でNHKのテレビ速報を見た洲本測候所長の馬場信夫（五五）

は目を疑った。突き上げるような揺れ、少なくとも生涯でこれほどの体感があつた地震など経験したことがないのに、洲本の震度がない。リストラの環で夜間は無人になっている測候所だが、震度計に直結したN-T-T通信回線で、震度は自動的に大阪管区へ伝わる。異常が起きて、無線連絡するしかない。車で東約二キロ

の測候所へ向かった。

そのころ、神戸海洋気象台の当直員はパニック状態だった。地震データなどを取り込むワークステーション五台のディスプレイが次々と床に落ち、激しい揺れの中で当直の花房が必死で一台を受け止めた。破裂した水道管から噴き出したのか、天井から水が滴る。ビニール袋を使い装置を覆った。

「PO（通信制御用コンピュータ）を守らなければ。震度の伝達も出来ない」。気象台南側の官舎から駆け付けた予報課長の饒村曜（四四）が考えたのも、まずそのことだった。高度な気象レーダーで日本列島を覆う気象庁の気象観測、伝達網。それは、世界最高水準のシステムだった。

だが、その神経に当たる肝心のN-T-T専用回線が、強い衝撃によって断線していたのだ。はじめのうち、そのことにだれも気付かなかった。「震度」は自動的に大阪管区気象台を通じて、気象庁に送られていると思っていた。

春海は念のため、VHF（超短波）無線で大阪管区に連絡した。「神戸の震度6入っていますか」「入ってない」「えっ」大地震の初期に、その規模を把握するために欠かせない、震源地周辺の震度は、こうして十八分間にわたり空白となった。

それがのちに東京の政府機関に甘い情勢判断をさせることになる最初の出発点となった。